

現代短歌分類辭典

第百一卷

津 端 亨 編纂

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辞典

第一〇一卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辭典

101

〒111

東京都台東区鳥越一丁目十八

発行所 現代短歌分類辭典刊行所

代表 津 端 亨

振替 東京 三一九三一四番
電話 〇三(八五二)九八六九番

昭和五十九年六月一日発行

定価二、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

目

次

今	三三八	歌数	一	二〇七	頁数
いま（現実）	一		いまいまして	二	二〇七
いま	一九九		いまいまして	三	二〇八
今一色村	一九九		いまいましてーもーよ	一	二〇八
今市	二〇〇		いまいと	二	二〇八
いまいちど	二〇〇		いまーか	二八四	二〇九
今市道	二〇〇		いまーが	一〇	二二三
今一体	二〇二		いまーがーいま	一	二二三
いまいま	二〇二		いまーかーと	一	二二三
いまいまし	二〇三		今川（人名）	二	二三四
いまいましが	二〇三		今川小路	一	二三四
いまいましが	二〇六		今川勢	一	二三四
いまいましき	二〇六		今川焼	一	二三四
いまいましく	二〇七		今川義元	一	二三四
いまいましけど	二〇七		いまーかーも	一三	二三五

いまーから	一	二六	いまさーね	二	二六〇
いまき（新附）	一	二六	いまさーねーど	一	二六〇
いーまき	三	二六	いまさーねーば	七	二六〇
いーまきーたり	二	二七	いまさーば	二〇	二六一
いまきり（今切）	六	二七	いまーさへ	三	二六二
いまきれ（今切）	三	二七	いまーざま	一	二六三
いーまきーわたらふ	一	二七	いまさーむ（終止形）	五五	二六三
いまけ	一	二八	いまさーむ（連体形）	一三	二六六
いまーこそ	九四	二八	いまさー	三二	二六七
いまーこそーあれ	一	二四	いまさーさらに	七	二七〇
いまーこそーと	三	二四	いまさーーながら	一	二七〇
いまーこそーは	一五	二四	いまさーに	二九	二七〇
今小町	一	二四	いまさーにーして	五	二八〇
いまごろ	三七	二四	いまさーにーしも	五	二八一
いまさーざる	五	二五	いまさーの	三	二八一
いまさーず	五一	二五	いまさーらめきーて	一	二八二
いまさーぬ	四三	二五	いまさーらめく	一	二八二

いまさらーを
 いーまさりーて
 いまさーん
 いまし(在し)
 いまし
 いまし(汝)
 在し(連体形)
 いましいま
 いましーか
 いましがた
 いましがたーと
 いましがたーを
 いましーき
 いましーけむ
 いましーけむーかも
 いましーけり
 いましーける

一
 一
 七
 一
 四〇四
 八三
 一四
 八
 二
 七五
 一
 一
 四八
 五
 一
 一
 二

二八二
 二八二
 二八二
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三
 二八三

いましーけれ
 いましーけん
 いましーし
 いましーたまはーな
 いましーたまはーね
 いましーたまはーば
 いましーたまひーけれ
 いましーたまひーて
 いましーたまひーぬ
 いましーたまふ
 いましーたまへーば
 いましーたり
 いましーたりーけむ
 いましーたりーけり
 いましーたる
 いましーつ
 いましーつつ

三
 一
 四〇
 一
 一
 一
 二
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一

三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八
 三三八

いましめし
いましめず

合計

一 九

五、三六六
首

三六八
三六七

いま【名詞】（今）

閑古鳥今かも鳴きて九輪草咲くらむ和田のかの古峠③

顔氏家訓は父の書庫にも昔ありき、いま身に親し老境の谷②⑧

神田にて靄に上りし赤き月いま小金井の冴ゆる夜の月②

鉄輪の道辺の山に去年見し白き群花今思ふかも①

陥落のサイレンに立ちあがりしがいま我が坐る畳あたたかし（多磨二）

球根を埋め了へて畝間にいま通す春さむき水が音をたて行く①

九州の同志のおくれるザボンの実かれらもいまさびしく暮らすらむ①

牛乳と甘藍を積みしトラックが今動き出すエンジンの音

旧藩のふるき町いま山間^{やまあい}にもさびれたりぬ徂くひとなしに①

機影いま雲間に消えしと思ふとき寒さ俄かに身ぬちにとほる⑤

記憶せよいま成人の男孫四十とならば惑ひをもつな②②

いま

今井邦子

土岐善麿

柴生田稔

中井コツフ

持田勝穂

加納小郭家

土岐善麿

葛原妙子

石原純

朝吹磯子

窪田空穂

いま

樹樹の梢に春雪ふかくつみていま夜明けむとするしじまは重し③

栗原 潔子

聞き古りし旅順の港いま見るは鈍くただ光る黒干潟のみ（光化門）

植松 寿樹

聴くがはとなりて今思ふ生徒等に過大要求をして来ざりしや①

鶴木 保

生薬と屑薬匂ふ町なりき今ひややけきビルの街筋

高安 国世

聞くにさへ吐胸つぶるる今我は吸吞とらせ仰にふふみつ⑪

北原 白秋

菊の花神代のかをりする中を現つ御神のいま渡ります⑧

尾上 柴舟

木靴よおまへは白樺の根もとにをれ私はいま跣足になる⑫

前田 夕暮

危惧もちてためらひたりし過去も落差をもちていまとはぞきぬ⑤

生方 たつゑ

議会政治なんてばかげたものをこの国でもいまやってゐる己たちの日本⑤

西村 陽吉

機嫌よきときのくせかも父はいま何か小声にくちずさみます（新萬葉集五）

土橋 好羊

象谷を下りしむかし七たりの二人はすでに今あらぬなり①

大村 呉楼

きしむ音今して吾子が乗れるかと起きあがり見る月夜ブランコ

五島 美代子

汽車の戸の雑木の夕日生れたる寂しき国に今かへり来つ（馬鈴薯の花）

島 木 赤 彦

汽車はいま湖底の跡にとどきゐてうねり走れり若草の原を（多磨四）

大 内 規 夫

汽車はいまのぼりとなりて窓下の川より吹ける風さやさやし②

大 橋 松 平

汽車が今人を浚ひてゆきしあと風寒きホームにわが登り来つ④

山 田 百 合 子

起重機にて吊り上げられし炭塊は音立てて落つ貨車の上にいま（新萬葉集七）

本 間 百 合 子

寄宿舎は今黙学の時ならし朝すがしく窓あけてあり（多磨四）

斎 藤 郁 子

季節いま春に移ろふしづけさよ雑木の梢に匂ふ日のいろ

若 林 牧 春

きその夜を儼が空しとつたへくる春雨の降る空いまくらし①

石 原 純

機体からつき出した手のひらの下に今横浜の市街がかくれた⑨（現代短歌大系）

前 田 夕 暮

北支那の事変に立てる友だちを今送り来てわが子汗ぬぐふ（支那事変銃後）

岡 麓

北の海氷の山の一時になだれくづるおもひする今（玉琴）

岩 上 勇 子

北の国ここにして今先生のおん忌むかへぬ糸瓜さく秋③

岡 本 大 無

いま

いま

北南かよふしぐれのあしはやみいましばらくははれしとぞ思ふ（新萬葉集別集）

三条実美

北見なる野付の山にふた夜寝て兄はひとり子を今嫁がしむ⑭（霜）

斎藤茂吉

北寄りの西、今ふくこれは季節風か寒し袷を透して身にしむ②

水野葉舟

義仲寺の庭に咲きつぐ白萩の今おとろふるけはひとなれり②

豊島逸水

築きたる石渠水涸れて汚しと今日のあたり吾の見しのみ③

吉田正俊

切符とか書物とか人の髪とかに触れて来た掌てよ今さし合す①

斎藤史

黄にあけに樹々もみぢせる山園のしづけきにいま歩み入るなり①

藤原東川

鬼怒川を西にわたりて土踏めば今さらさらに君ししぬばゆ

古泉千樫

樹の花のゑにずこぼるる土あたらし今住める人の朝をゆききす②

遠山光栄

きのふまで道にて聞きし蟬時雨いま声もなし涼雨流らふ①

初井しづ枝

昨日までわれに声かけ居給ひし父のみ骨を今拾ふなり（新萬葉集八）

矢島誠

昨日もない明日もない今はてる頬に掌をあてて枯草にゐる① （現代短歌大系） 嘉納とわ

樹は天をめざすと書きし老人のこと今おもひいづかかはりもなく①

上代 皓三

機はいま大阪をすぐと告ぐれども山又山のはるか上空⑥

榊 富照子

敵しかりし戦ひの日に人知りきいま寡婦となり洋裁教ふ①

磯 幾造

敵しかりし父をうとめる子のわれは今甘過ぎて言守られず⑤

鈴木 康文

きびしさは冬の海境^{うなざか}いまのぼる白のひかりの日のたまのなか③

鹿兒島 寿蔵

急角度に曇につづく坂ありて今のぼり行くトラックが見ゆ①

佐藤 佐太郎

起伏ある冬の岡べに幽かにも香に立つ枇杷の花ぞ今咲く①

橘 馨

君うらみ泣きし灯かげも今ひたになつかしきかな別れて住めば①

矢沢 孝子

君が今かへるとおもへば夢覚めてあとは名残のつゆとなりけり(新萬葉集別)

有栖川宮妃貞子

君がいまささやきしこゑがこの部屋の壁に沁みいりて或ひはのこらん①

荒木 暢夫

君がためわれはいまこの洞窟をかなしみに往く道と名づけむ

吉井 勇

君が代はいま春なりとから衣うたぬひびきの高くもある哉②(現代短歌大系)

税所 敦子

いま

いま

君し今何を思へる夜のくだち慕情を哭きて鴉遙けし

小笠 数子

君と見し柳いまなき寂しさに大川端をさまよひにけり^⑭

吉井 勇

君とわれ塵にかさなる塵ならし行方も知らず今なりぬべし^⑮

與謝野 晶子

君ならぬ君われならぬ今ひとり四人のなせる恋のこちす^⑯

與謝野 晶子

君に逢ひて今帰りつつ行方なくしかも惑へるこの愁ひはも^⑰(現代短歌大系)

新井 洸

君により得たえでわぶる吾心闇の松原いまゆくがごと^⑱

安江 不空

君の今踏みつつ来るは日の出前薔薇もて飾る海のきざはし^⑲

與謝野 寛

君の心いま失ひて何せむに一夜は明けて雪積りゐし

三国 玲子

君はいま袈かたろもきて驢馬ろばにのり盧山のあたり雪や見るらむ^⑳

落合 直文

君はいま高く昇りて恋人に背くと鐘を打つにあらずや^㉑

與謝野 晶子

君はいま何してありや久にわがおとなふ声に驚きやせむ^㉒

金子 薫園

君はいま真昼の砂のかがやきに眼やくらみけむわが肩に凭る^㉓

吉井 勇

君もいまきこしめしけむひさかたのくもるをわたるはつかりのこゑ①

君もさうだ、また僕もさうだ今ここでみじめな最後にあふとも悔はもたぬ⑦

君よいま空の彼方に紅きもの墜ちてはてなき色に消えたり①

君をすてて多くの人をこひしうる身のかろさをばいま知りにける①

気むづかしくアグリッパが今眉をよせる秋の日が急に傾いたから⑤

京都に帰る電車にのりてなにかさびし今来しあたりをながめつつをり②

狂乱の一さしを今舞ひ終へてみ空はるかに還りゆく君①

逆風に向ひてすすむ船は今鳴戸のうづのただなかをゆく①

宮城前いま人民の広場プラカード、赤旗、のぼりわく五十万の歌声

巨船いまひそかに眠る夜の更けを後部タラップ垂りしままにある(多磨二

清らなる砂より生ひて並み立てる木々は緑をいま噴かむとす②

さらさら金きんのさざなみゆれてあり月大らかに今岸をはなる④

いま

昭憲皇太后

矢代東村

近藤元

田波御白

小宮良太郎

高橋希人

関戸信次

藤原東川

司代隆三

巢木健

岡崎義恵

生田蝶介

いま

氣流いま乱れがちにて寒暖のその差をしるくともごもに来る④

霧雲は迅くながれて柿赤くつづるひと樹をいまつつみたり④

霧こめて夜はあけしらみ焚く窯の火の焰いま極らむとす①

キリストの巨象にからむ靄はれてこの山上にいま斜陽さす

伐りつくした山に別れて行く人々が今、川をわたってゐる⑨

桐の実をはむ鳥の名の城も今せめおとすらしみいくさのとも①

霧の夜の谷間に立ちて眼を閉づる世の淋しさはいまわれに落つ①

霧ふかみ今見えし花かたはらにありと思ひてかそけかりけり(新萬葉集八)

桐よりも厚き葉露にしとど濡れ今落ちんとすわが心より①⑥

祇王寺の庭に楓葉散り敷きて嵯峨野の秋はいま深からん①⑤

近代企業機構がひしめくビル、その高層で今奏される日本の古風な楽⑤

銀屏の灯映しろきひとところ明月のごとし春夜今あり⑩(現代短歌大系)

塚田 菁紀

塚田 菁紀

菊山 当年男

相良 義重

前田 夕暮

昭憲皇太后

森園 天涙

村野 次郎

與謝野 晶子

原 三郎

小宮 良太郎

北原 白秋

木馬道^{きんま}かはらに架けて植林のから松は今芽ぶきあたらし⑮

銀翼いま夕陽に強く輝けり英仏通ひの飛行機ならむか(多磨二)

勤勞奉仕の官吏もまじり炎天下農民はいま草とたたかふ①

空間にひかりは寒くおとろへて長き弔辞をいま書きをはる④

偶像も變化もわれはうやまはむ今この心いやす道あらば①

遊女^{くづめ}におとれる心もつ人と吾しらずして今悔いにけり③

枸杞の実のくれなるはいまおとろふと折りし一枝になぐさまなくに(支那事變戰地)鈴木英夫

草あらし赤土原に湯の宿も酒場も理髪店もいま建たむとす

草草草地だ吾を今つつみ去らうとする巨濤^{きよたう}だ大傾斜地の

草の戸に膝折りまじへよむ書は今世の人のすててよまぬ書⑥

草の中たんぽぽの実はまんまるく光り含みて今溶くるかに①

草花に月さしそめぬ、われ等いま柱によりてしづかなる宵①

いま

松村英一

長島寿義

藤原東川

安田青風

柳原白蓮

安江不空

鈴木英夫

柴生田稔

前田夕暮

島木赤彦

富岡冬野

岡稻里